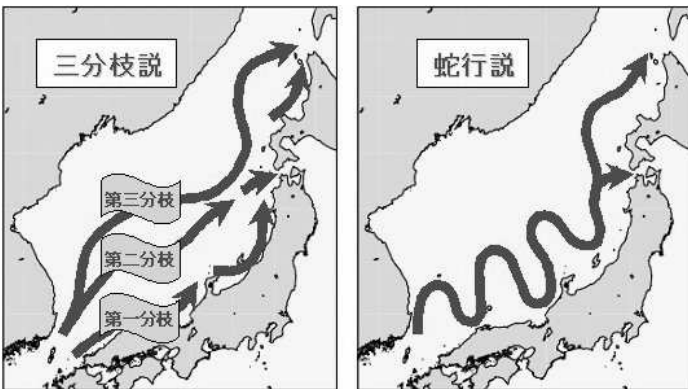


飯南町 板屋Ⅲ遺跡から出土した縄文晩期後半の土器に、稲粃の圧痕があることが紹介されていました。菜畑遺跡や板付遺跡のように水田遺構が見つかっていないので、水耕稲作の証拠とは言い切れないようです。しかし、日本国内にはイネの祖先となるべき野生種が存在した痕跡はなく、日本国外で栽培種となったイネと、その栽培技術を持った集団の移動により、日本へ伝播したと考えられているそうです。また日本の温帯ジャポニカ種は他の地域に比べ多様性を喪失していて、それは渡来したイネが極少数であったことを示しており、そのことから「一握りの粃を携え丸木舟でやって来た人たち」を、想像することが出来るのだそうです。

昨年登壇された宮本先生は、畔を作ってそこに導水することで“雨季”を、そして出穂後に排水することで“乾季”を作り出すことで、水耕稲作が始められたと解説されていました。植物にとっての“季節”を管理することで、人類は食糧問題を解決したのですが、今まで森でドングリを採集していた人たちが、急にイネを栽培することを思い付いたのではないと思います。

栽培イネの起源は長江中・下流域とされていますが、森のはずれの湿地近くをナワバリとしていた集団は、湿地に生息する野生の稲も採集食糧としていたと思われます。堅果類に比べると採集にかかる手間と、採集できる量に大きく後れを取りますが、豊かな森にナワバリを確保できなかった集団には致し方ありません。広くて平らな土地を流れる中国の河川は川床勾配が小さく、大雨が降ると容易に氾濫したでしょう。またその氾濫で浸水した地域は、なかなか水が引きません。最近の中国でも、浸水期間が一ヶ月を超えたことがあるのです。古代においてはそのまま流路が変わってしまうことも、数年から数十年単位で繰り返されていたはずです。河川の周辺に形成された湿地帯には野生のイネが生育していても、流路が変わり水が枯れるとイネの群生が消滅してしまいます。その一方で、新たな場所に群生地が形成されることもあったと思います。個体としての“人”の生涯に、食糧の採集先が大きく変化してしまう経験は、森をナワバリとしていた集団にはなかったでしょう。でも湿地近くの集団は、十数年程度という短期間に採集先が変化するを経験できました。そして、今採集している野生のイネの生育地を保全するには、どうしたらいいのかに気付いたのではないのでしょうか。

彼らが得たイナホは彼らが蒔いたイネではなく、従来の野生種に過ぎませんが、生育地が干上がらないように川すじを管理することで“栽培していた”と言えなくもありません。現代でも出穂後に田んぼの水を落しますが、穂の登熟にとって落水は必須ではないようで、落水はもっぱら刈入れ作業の負担を抑えるためのようです。でも、石包丁による穂摘み作業でも、乾いた地面の方が都合よかったと思います。野生種の管理の経験を重ねていくうちに、既に干上がってしまった昔の湿地帯に、人工的な導水路を作って湿地を再生し、分けつしたイネの苗を植え付けることを思い付いていったのかも知れません。



“海上保安庁のホームページより”

ところで、海上保安庁のホームページには、対馬暖流の流路について二つの説が掲載されていますが、よくわかっていないのが実態のようです。渡来人の航行ルートを探るためにブイを流した実験でも、漂着地はさまざま、影響する要因が多すぎるのが原因のようです。仮に蛇行説に従えば、半島から渡来人は半島沖を迂回して直接出雲に行けそうです。対馬を経由して北九州に至る標準的な渡来ルート以外にも、山陰の日本海側に直接渡航した可能性は否定できないのではないのでしょうか。出雲平野に展開された集落の多くは、北九州から沿岸航法で

やってきた人たちだったかもしれませんが、鳥居龍蔵氏が日本書紀八段一書の四の逸話を根拠として主張された、出雲を直接目指して渡来した集団 もあったから、ヤマトの中枢にその伝承が伝わって書き記されたのかもしれませんが。三瓶山の火山灰が、島根半島にせき止められてできたと言われる出雲平野には、湿地帯が多いとのことでした。宍道湖に注ぎ込んでいる斐伊川も、当時は西の日本海に流れ込んでいましたが、その流路は確定できていないようです。出雲平野はその成立に起因して起伏が乏しく、そこを流れる斐伊川は、スケールこそ大陸に及ばないものの、大雨で氾濫することが多かったはず。そのため痕跡を残すほどに、川床に特徴的な地形を形成できなかったから、流路も判然としないのではないのでしょうか。人が定住するには不向きな低湿地帯が点在する出雲平野は、長江流域原産のイネの生育地としては適していたのかもしれませんが。まだ栽培とすら呼べない原始的なイネの生育管理方法を、誰かが種子といっしょに出雲に伝えた可能性はないのでしょうか。原産地の大陸でさえコメを中心とした食生活が始まる前なら、いわゆる弥生土器もまだなく、その作り方も伝播するはずがありません。縄文晩期の土器を作っていた板屋Ⅲ遺跡の周辺の湿地帯には、何世代かに管理された長江原産の稲の群生地があり、そこから採集されたイネ粃が紛れ込んで、土器に圧痕を残した可能性があるのではないのでしょうか。